



若者へのメッセージ②0

編集工学研究所長

松岡 正剛

【第一回】フラジリテイ——

若者よ、「弱さ」に目覚めよ

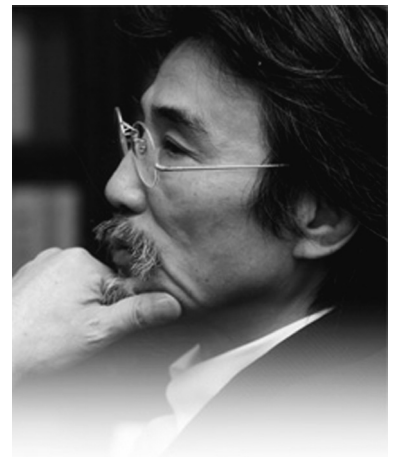
若い時期にこそ「弱さ」や「傷つきやすさ」を深く感じられるようになっておくべきである。自分が傷つきやすいことを思想することができれば、他人を傷つけることの無謀にも気がつく。これを私は「フラジヤイルな自覚」というふうに呼んでいる。諸君もフラジヤイルな感覚を研ぎ澄ましてほしい。

“fragile” 壊れもの注意!

青年も青女も傷つきやすいのが本来である。傷つかない青年青女なんて、古来いなかった。たんに悩ましいのではない。仏教の原初で言うように世間はすべからず「一切皆苦」で「諸行無常」なのだから、どんなときも悩ましく

ないはずがない。苦しめないはずがない。空しくないはずがない。だから大いに悩んでけっこのうのだが、それよりも気にしてほしいことがある。それは、自分が傷ついたという思いをもつということについて、注意深くみてみるということだ。

ガラス製品や工芸品を郵送するとき、「壊れもの注意!」という赤いラベルやタグが付けら



松岡 正剛 (まつおか・せいこう)

1944年、京都生まれ。1971年に工作舎を設立、オブジェマガジン『遊』を創刊。87年、編集工学研究所を設立、情報文化と情報技術をつなぐ研究、著作、企画に携わる。東京大学客員教授、帝塚山学院大学教授を経て、現在、編集工学研究所所長、イシス編集学校校長。

著書は、『知の編集工学』(朝日文庫)、『知の編集術』(講談社現代新書)、『空海の夢』、『山水思想』(17歳のための世界と日本の見方)、『匠の流儀』(経済と技能のあいだ)、『連塾—方法日本(シリーズ全3巻)』、『18歳から考える国家と「私」と行方』(東・西巻)(以上、春秋社)、『遊学』(花鳥風月の科学)、『ルナティックス』(以上、中公文庫)、『フラジヤイル』、『日本数寄』、『日本流』(以上、ちくま学芸文庫)、『日本という方法』(NHKブックス)、『松岡正剛の千夜千冊(全7巻)』(求龍堂)、『白川静—漢字の世界観』(平凡社新書)、『多読術』(ちくまブリマー新書)、『NARASIA—日本とアジアの潮流』(丸善)、『にほんとニッポン』(工作舎)ほか著書・共著多数。2000年から始まったウェブ上のブックナビゲーション『千夜千冊』は現在も更新中(<http://1000.ya.isis.ne.jp>)。

れる。欧米では「fragile」となって「フラジャイル」とか「フラジール」と発音する。ちょっとした衝撃などで物品が壊れたり破損したりしてしまうので「取扱いに注意」してほしいという郵送者の指示だ。

私たちもこれなのである。人の心や体というもの、そもそもフラジャイルなのだ。ちょっとしたことで壊れたり破れたりする。子供時代や青春においてはなおさらだ。

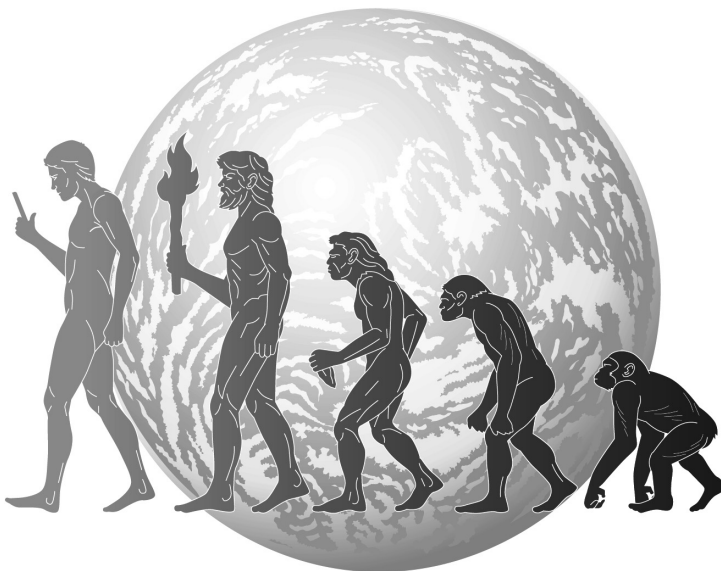
“人間というこわれやすい種”

人間という生物がフラジャイル・スピーシーズであることは、私が敬愛もし、対話もしてきた医師ルイス・トマスの『人間というこわれやすい種』（晶文社）という名著が証している。人間という生物は生物学的にも毛皮や牙や爪、頑丈な胃袋や視力を失い、かつまた直立二足歩行という危うい体勢で人生をおくることにした。そのため集住し、住居を設け、狩猟や農耕や漁労によって食糧を確保し、村落をつくってリーダーを立てた。

言葉と道具もつくった。これで動物世界と対抗できることになり、自然を支配することさえ可能になったのだが、ふと気が付くと人間どうしのコミュニケーションや共感を維持すること

のほうがいかに困難なものになった。のみならず「精神」や「意識」というデリケートなものを作り出してしまったので、さらに傷つきやすくなったのである。

このような壊れやすさのことを「フラジリティ」という。生きるということは人間特有のフラジリティとの相克なのだ。とくに若いときの私たちはフラジリティに敏感になる。僅かなことが自分を無視したり、足蹴にしたりしているように見えるものだし、他人の言葉が攻撃的に感じられ、自分がやたらに弱い者に見える。そしてしばしば途方にくれたり自信をなくす。



「フラジリティ」「壊れやすさ」を武器に

かつて私は『フラジャイル』（ちくま学芸文庫）という本を書いた。編集者は「弱さはつねに過激である」という帯をつけた。そうなのである、私はこの本のなかで「弱さ」や「壊れやすさ」や「傷つきやすさ」を採り上げて、フラジリティを認知することこそが新たな人生哲学の武器になりうることを説いたのだ。

優勝劣敗は人生につきものである。争いも戦争もなくならない。差別もいじめもなくならない。社会は「からかい」に満ちていて「あざけり」を歯車に回転してきたのである。かつてフランスの哲人ルネ・ジラルドが『世の始めから隠されていること』（法政大学出版局）であきらかにしたように、社会の歴史はそもそも差別と犠牲とその隠蔽いんぺいによって成り立ってきたのである。残念ながらこのことは二一世紀の今日でも変わらない。

ということ、私たちは人間につきまとう「壊れやすさ」をもとに社会をつくりあげ、「伝わりにくさ」を前提にしてコミュニケーションをつないできたわけなのだ。そうだとすれば、私たちは「弱さ」に目覚め、フラジリティを武器にすべきなのである。